創刊200号記念
特別座談会

私のあの時代、そして今



本誌は今月号で創刊200号目を迎える。それを記念して、創刊当時からの３名の読者と、本誌創刊の影の仕掛け人だった当時のスガノ農機創造企画課長・黒川英一氏を含めて20年を振り返る座談会を行なった。会場は、第11号の農業経営者ルポにご登場いただいた高見澤憲一氏の農場。当初は季刊、その後、隔月刊、月刊となったので、200号までに19年間と半年の時間が過ぎた。創刊時42歳だった筆者を含め、座談会参加者は皆、あれ以来20年の歳月をくぐり抜けてきたことになる。まだ「一粒たりとも米は入れない」と全会一致で国会決議されるような時代だった。そんな中で、誰もが自らの新しい農業経営者としての生き方を模索し、未来へのチャレンジをしていた。そんな３人の読者と創刊の恩人である黒川氏との出会いは、楽しく、夜の耽るのも忘れて痛飲したことも書き添えておこう。

（昆吉則）

背中を押してくれた名プロデューサーの存在

昆吉則（本誌編集長）　1993年5月に創刊した『農業経営者』は季刊、隔月刊を経て、月刊誌になり、200号という節目を迎えました。雑誌を始めたときに比べて、読者の皆さんはチャレンジを続けてこられて、経営が大きくなりましたね。本日は高見澤憲一さんの農場を借りて、読者を代表して3名の農家とプロデューサーとして僕の背中を押してくれた黒川さん（元・スガノ農機㈱創造企画課長）と一緒にこの20年を振り返ってみたいと思います。

黒川英一　まず、ここまで続くとは思わなかったよね（笑）。始めた時は不安で、半信半疑だったから。

昆　ええ、そうでしたね。ですから、気付いたら200号まで来ちゃったというのが正直な今の感想ですね。

黒川　雑誌が始まる前にそもそもスガノ農機の新聞広告シリーズのために2人で月1回農家を回って取材をして文章を昆さんに書いてもらっていました。その中で生まれた「収穫は次の始まり」というインパクトのあるキャッチコピーを見て、昆さんは凄いなと。そこで、自己主張の強い昆さんに代理店は無理。メーカーにならなきゃダメと思って、「昆さん、雑誌作ろうよ」といろいろ提案したんだけど、なかなか腰が上がらないんだわ。



黒川英一 氏
元・スガノ農機㈱創造企画課長。新聞広告からプラウの啓蒙に尽力した。2007年に同社を定年退職。

昆　それは始めるとなると冒険ですから……。私がグズグズしているところを絶対伸びるからと黒川さんが背中を押してくれて、さらにこういう風にしてやれば儲かるだとか、援助を引き出してくれたりだとか準備してくれたんですね。

黒川　金銭的に負担のかかるものだから何とか協力して、『農業経営者』の中で新聞広告シリーズの続きをやってもらおうという企画もありました。そこで何とかうまく軌道に載せるためにユーザーリストを提供したり、送料を負担したり、販売価格を決めたり、四苦八苦してアイディアを考えましたよ。



連載漫画「よみがえる大地」。黒川氏が台本を作って創刊号から8号まで続いた。当時珍しかった農業経営をテーマにした漫画。

昆　ありがたかったです。農業をテーマにした漫画は黒川さんが台本を書いてくれて。

黒川　創刊号から『よみがえる大地』という漫画を始めたんだけど、季刊誌だったから次の雑誌が届くころには、ストーリーを忘れちゃうんだよね。だから話が続かなくてね。

昆　それでも日本初の「農業経営技術漫画」は画期的だった。そして、経営者の顔を表紙にしようと言ったのも、その写真を撮影したのも黒川さんでした。

黒川　表紙に写真を載せるべってね。しわくちゃで鼻毛が見えるくらいの農家の顔を大きく載せたね。

昆　高見澤さんが表紙に載った時（本誌11号）は若かったな。まさに好青年という雰囲気でね。

高見澤憲一　そうですね。あのときは農業始めて10年くらいの34歳でしたから。



高見澤憲一 氏（51）長野県南牧村野辺山
高原野菜栽培・メロン・スイカ栽培から転向して、「雲の上トマト」のブランド名のトマトを生産。

黒川　でもあの頃は経営者って顔じゃなかったよ。今、ようやく経営者の匂いがしてきたように思うね。

高見澤　今日来ていただいて驚いたんじゃないですか？　今年からキャベツ・ハクサイ・レタスが完全になくなって、トマト1本に転向したんです。最終的に選んだのは野辺山で誰も作っていないトマトでした。

昆　普通は産地化しようとするところの逆を行くわけだ。

高見澤　トマトは万人が食べるし、ここは標高1300mもある内陸で、雨が少ないということは、「日本のアンデスだ！」ってね。

黒川　ホントに、一面のレタス畑が、全然跡形もなくなっちゃったね。

篠原好明　うちも昨年栃木でトマトを作り始めて息子に任せていたんですけど、離れたところだと売り先の確保が課題だと分かりました。

お客様の存在に気づいて一緒になって感動すること

昆　篠原さんは「後継者は息子じゃなくていい」という話をされてましたが、息子さんも帰ってこられて就農されたんですね。

篠原　はい。後継者として育ててきた矢野を見て、一緒に働きたいと思ったらしいんです。



篠原好明氏（57）長野県佐久市
㈲あぐり信州代表取締役。品目は**キャベツ・ハクサイなどの露地野菜**13～14ha。

昆　篠原さんは露地野菜作ですが、随分早いうちからトマトや長イモなどを始められましたよね。きっかけは何だったんですか？

篠原　99年に法人化して5～6年ほど底値状態の時期が続いたんで、何とかしなくてはいけないと思ったんです。それに昆さん、言ってたでしょ、作るだけじゃダメだって。でも、**ハクサイ・キャベツを自分たちで売る**のは非常に大量になるから難しいんです。鮮度が命ですし。そこで自分で直接お客さんに売るためのこだわりが見えやすい物に挑戦しなくてはいけないかと思って、トマトや長イモを少しだけ始めたんです。一個ずつ住所を書いて発送するのは非常に面倒で手間がかかるけど、「おいしかった」というお褒めの言葉をお客さまからいただけるのは舞い上がるほど嬉しい。農協に出していると全くそういう機会がないから、銭金じゃなくて、やってよかったという充実感や達成感、頑張ろうっていう気持ちを持てるんですね。

昆　農家にはお客様に出会う、その存在に気づく過程が必要ですよね。

篠原　感動しますね。だから採算度外視でやってしまうんですよ。

黒川　僕も当時は皆さんの消費者が喜んでくれるというのと同じで、プラウ体験教室などのイベントでプラウで起こすと農家さんが喜んでくれた。その笑顔を見ると、辛さとかが吹っ飛んじゃって、僕らまで楽しくなってまた頑張れたんだよね。

昆　僕も同じことですよ。読者の数が少なかったとしても、その人たちとの関係性が異常に深くて、その関わりから生まれる感動が大きくなる。やり抜いた人は突っ走るしかなくて、突っ走る中で、海外に行く人もいれば、家族以外の雇用を始める人もいたりして、新たな悩みを抱えたりもするんですね。でも、その新たな悩みがまた次への原動力になっているということを皆さんの話を聞いていても感じます。

篠原　だけど、好きな分野や得意な分野があって、うまく販売までやれている人は営業活動や販売活動が好きな方が多いと思うんですけれど、私は作物に向き合って自然の中で苦しみながら成果を出していくことに達成感を感じるものですから、売ることってエネルギーが要る仕事だなと思うんです。

昆　僕も農業経営者っていうのは**作ることが本分だと思っています。**かつて、あるいは今でもあまりにマーケットだとかお客様という存在に気付かないままの人が多い。お客さんに「ありがとう」と言われる喜びに出会うことで、人は凄く変わっていきますよね。売るのはパートナーにやってもらえばいいわけで、本当は生産だけで食えないという農業の方がおかしいので、生産もそこまでいくべきだと思います。

高見澤　私は今、中国やフィリピンなど海外にも出ていますが、本当にやりたいのは生産です。

昆　どうしてもやりたいのは生産なんだというのが肝心なことだと思います。そうでなければ他の事業者と農業経営者の区別がなくなってしまうから。ところで三輪さんはいつ農協をやめたんでしたっけ？

三輪民雄　37歳まで17年間農協にいて営農指導員もやってました。辞めた時にはミツバのハウスが**でき上が**っていたので、地元の農協の理事が「早くやめないとやりたいことをできなくなるぞ」って言ってくれて。

昆　いつ頃からコメの面積が増えてきたんですか？

三輪　01～02年頃から伸び始めて、04年に法人化したけれど、最初の3年間は赤字でした。お米の単価が下がったり、小麦の買い取り制度が変わったり、ミツバの値段がずっと上がらない状態でしたから。そこで刈り取る田んぼから手を付けたんです。自分の農場と同じようにやっていたら引き受ける面積が増えて、15haくらいになった頃に雇用を始めました。



三輪民雄 氏（59）群馬県前橋市
㈲三輪農園代表取締役。品目は小麦35ha、水稲22ha（飼料稲を含む）、ミツバ1,300坪。

昆　今はどのくらいの面積に？

三輪　麦は35ha、二毛作で飼料米を含むコメが22ha。私のような小心者が農協をやめて自分で始めて、親に見放されて手伝ってもらえなくなって、人を雇うようになり、機械に投資するようになって、農業はどこまで借金できるのよなんていう話もスガノの仲間や農業経営者の読者仲間とはしてきましたね。

昆　創刊した年にスガノの協力を得て開いた一泊の勉強会には全国から30～40人集まっていましたが、宴会が始まると泣くオヤジがいるんです。要するにこんな人たちに出会え

たって。今から20年も前の頃は、農業や村の環境も今とは全然違うでしょう。**その人たちが同じ想いを持っている**ような人にそこで会って泣く。そのくらい地元では特殊な存在になってしまっていて、嬉しかったんだろうなと。それが仲間づくりにつながっていると思いますね。

無理・無茶・無駄のおかげであの頃の夢がかなってきた

三輪　今から20年前には夢にはあったけれども、こんな農業経営が現実になろうとは思いませんでした。これまでの過程ではいろいろなことをやりました。例えば、正月に新しいカレンダーの12月の裏に絵を描きました。女房とこたつで簡単に「こうなりたい」「ああなりたい」と書くんですが、カレンダーをかけると忘れちゃうんです。それで、暮れの最後にカレンダーをひっくり返すと何か書いてある……そういえばこんなこと書いたよな。「お父さん、今年田んぼが2ha集まったよね」とか「ハウスまた一つ建てちゃったよね」とか書いた通りになっていくんです。農業経営改善計画、これも絵なんですよ。5年先を書けって言われても5年先なんて分からない。でも書けっていうから書くんですよね。これが3年くらいで5年先を達成しちゃうんですよ。

篠原　そうだよね。意外と早くクリアしていて、5年後に書き換えの時期がくると、ちっぽけな夢を描いていたなというイメージがあるな。

黒川　5年計画で立てた目標を3年で達成してしまうというのは本当に凄いね。普通、書いてもそうならないけどな。

昆　ハハハ。作る器に合わせて人は育つって昔の人はいうけれど、やはりみんなホラ吹きなんですね（笑）。

黒川　オリンピックの選手か誰かの言葉で、努力すれば必ず夢がかなうわけではないけれど、努力しなければかなわないというのがあったね。

三輪　そういう夢を書いておいて資金を借り入れて、機械をバージョンアップして新たに投資すると、周りの人や農業改良普及員からもよく過剰投資だって言われるけれど、そのくらい揃えたおかげで今の経営になってきたわけ。

昆　北海道の勝部さんの話でも家1軒分のトラクタが過剰投資だと言われたのを1年で償却してしまって、2年目には2台目を買っているんだよね。皆さんを見ていると、みんなが買えないところで買える人が次に行きますよね。今なら水田で100馬力級のトラクタまで持ってしまうと。トラクタのことだけじゃなくて



【創刊～100号】　表紙は、経営者ルポで取材した農家の顔。表紙に載りたいと密かに想っていた読者も!?



【101～147号】　土の館に収蔵されているトラクタの写真に、記事のタイトルを載せた表紙でビジネス誌風に。



【148～192号】　特集テーマから連想されるイメージした表紙に。マーケットを意識した内容が濃くなった。



【193号～】　『農業経営者』タイトル背景に土の写真を載せて、今年4月より表紙をリニューアル！

他のことも同じでしょう。

篠原　田舎の人同志だと農村社会の物差しで測られちゃうという部分がありますよね。

昆　だから、よその土地や異業種の人と出会うということに凄い価値があったんだね。

三輪　今のトラクタはみんなキャビン付きだけど、**私がいきなりキャビン付きのトラクタを買ったら、無駄だとか過剰投資だとか贅沢だって言われました。**でもそのおかげで朝早くから夜遅くまで残業しても苦にならないし、遅れていた作業が追い付く。追い越すことはできなくても最後は人並みには終わります。

篠原　さらに過剰投資は見えないところで効果を発揮することもあって、モチベーションが上がったり、もう少しやるかやらないかを迷った時に影の力を見せるんですよ。

昆　雨が降る日本って気象的制約が多いでしょ。農業っていうのはいかにその風土のなかで生産を最大化させるかだから、限られた時間で作業を終わらせるためには、それだけの準備がないとできない。

高見澤　息子が農家に入るときに、**MFやジョンディアのトラクタを買っちゃう親心っていうのは地域農業の若者の育成、後継者の育成という意味では大事なことだと思います。**お互い若者同志の競争を生むのも大事。でも、「無理・無茶・無駄」をやらない人間が、その先をシミュレーションしてその言葉を使っているからおかしなことになってしまうんですね。

三輪　やる前にそれ言われても困るんだけどね。

昆　親心には気づかなかった。それにしても僕たちは無理・無茶・無駄をやってきた人間たちばかりだね。

篠原　男の人生の70％はそれなんだけど、無駄をやってる**奴に限ってパワーがあるんじゃないかな。**

三輪　若い時の無理、無茶、無駄、遊びとかって大事だよね。

新しいものに飛びつける人たち

昆　高見澤さんのお父さんは農家じゃないんですよね？

高見澤　父は産地集荷業者をやって細々と農産物を作っていた程度でしたね。なので、私は農業に就くことは全く考えていなくて、若い頃はいろいろな職を経験して、東京で模型製作やCM制作の仕事をしていました。ところが「日本のデザインはカートリッジだ」というキャッチフレーズにショックを受けた頃に、誰も使わない農地があるという話を両親が持ってきたんです。そこから素人同然で農業を始めました。就農してからも冬は東京へバイトに出かける生活が4年ほど続きましたね。

昆　ルポで取材に行ったときに「オブジェが作品じゃなくて、自分の生き方そのものを作品にしたいって言ってましたね。

高見澤　農機具も動かなくなれば使い捨てられてしまうから、捨てるんだったら何か形にできればと冬の間にそんな製作をしていました。

昆　この辺りの伝統的な農業経営をできるまでにはどのくらいかかりましたか？

高見澤　機械や倉庫をそろえて、当初からは10年くらいかかりました。その間、ガットウルグアイラウンドやO－157の問題を突き付けられて。この地域がレタス・**ハクサイの**産地化されていることは凄いことですが、捨てても補助金が出てくることや燃料や機械、労働力までも海外から持ってくるやり方に疑問を持つようになったんです。さらに、農家は風土とともに生きて、社会の変化に惑わされずに取り組める人こそ生き残れると思うようになったのかな。

昆　それと何かが形になると新しいことをやりたくなっちゃうということはないですか？

高見澤　ええ、次のことを考えなくてはいけなくなるんですね。スピリッツの話で、経営がどうのということではないのですが、**「江刺の稲」**などにも刺激を受けました。

昆　神様は現在の自分に飽きるように仕向けてるんじゃないかと思うんだけど。結局みんなそうじゃないですか（笑）。**それで、いつ、新しい**スタイルの経営を始めたんですか？

高見澤　42歳の時に始めたのが、メロンです。次にスイカと枝豆に挑戦しました。体力勝負的**なキャベツ・ハクサイ・レタスで成り立つ経営な**らいいのですが、もともと自分の土地ではないですし、年齢を重ねても続けられる作目に今のうちに変更しておきたかったんです。でも、葉物



後ろにあるカブトムシのオブジェは高見澤憲一氏の若かりし日の作品

野菜から果菜への切り替えは難しくて発想を変えないといけないんですね。

三輪　相当変わり者だね。

昆　メロンが売れなかった時に、野辺山は産地でないから売れないと言われると、さらに産地でないものを探し始めたんですか？

高見澤　メロンやスイカの傍らのハウスで、トマトを栽培試験していたんですが、ある日埼玉から来た人にたまたま「おいしい」と言われたんですね。夏場は忙しくて水も肥料もやらない、放任で育てていたんです。なら始めようかと思って、トマトにしたんです。

昆　今年でトマトは何年目ですか？



高見澤氏の農場。今年から露地での高原野菜の生産をやめた。売上は大幅にダウンしたが、彼はその道を選んだ。

高見澤　8年目になりますね。最初、JAに卸したときは買いたたかれていたんですが、苦労して東京方面に営業したおかげで売り先も増えました。今年からはジュースへの加工も始めました。

未来の農業を継ぐ人たちのために

昆　本誌でも何度か「息子は後継者じゃなくていい」というテーマを取り上げてきましたが、篠原さんは矢野さんを後継者として紹介してくれました。

篠原　矢野は隣の農場で2年ほど責任者として働いた後にうちに来たんですが、他の従業員とは違って、意欲が高く、作物のこともいろいろ聞いてきました。引退までの時間が限られているので厳しくレベルの高いことを教えています。

昆　篠原さんと矢野さんの関係を見てきた息子さんが農業をやりたいと言い出したのを見ていて、教育って見せるだけじゃなくてやってみせることなんだといういい話を聞かせていただいたと思ったんですよ。

篠原　そうですか。矢野を育てるのにいい機会になっていますよ。

高見澤　後継者を育てる、雇用をするという継続的なことに取り組む場合は、自分が新たなことをしているだけでは済まされないことを突き付けられる気がします。同時にお客様に供給しているという責任があるのが経営なので、自己満足だけでは成り立たなくなるのだなと。

昆　他の先進国の農家と何が違うかというと日本の農家は事業者意識が欠如していること。法人化しても、一般的な会社のような体制まではできていないところが多いよね。我々が村を飛び出してまで残したいと思う風土や伝統を残すためには、後継者への継承や雇用を進める体制を整えるしかないんです。チャレンジしてこられた皆さまに伝えていっていただきたいですね。

三輪　我われはまだ呪縛されているけど、次世代は縛られていないね。

篠原　以前のインタビューの時に、60歳で引退すると言い切ったから、スパッと手を引きたいと思っているんです。それが後継者を育てるには一番いいかなと。そう思い立った時に、黒川さんみたいにちょっと背中を押してくれる人がいると次の世代もスムーズに始められるかな。

高見澤　農業はすぐに儲かったらダメですよ。

篠原　そう。「困難によって人は宝石になる」と次の世代に伝えています。背中を押してくれる人に出会うのもその人の人生の運だと思うし。

昆　行動しないと優れた他人に出会えないからね。

篠原　自分から求めることも大事だし、見えた運をつかめないとね。振り返ってみると、自分も含めて、30代前半で何らかの絵を描き始めて、30代のうちに滑走路に立って、40代で飛び立つっていうのが、うまくいくっていうのがあるように思うんです。40代の初めってある程度、世間知らずの部分が逆に武器になっていたりするんですよね。だから世代交代も早い方がいいと思うし。

昆　でも、本当は30代でやった方がいいんですよ。この読者の仲間であったり、スガノの仲間の人たちって、これがすごく珍しいことなんだけど、地域を越えた、作目を越えた人たちが仲間になっていますね。

篠原　最初は雲の上の人って思ったけれど、村に帰ればみんな変わり者といわれる人ばかり（一同笑）。

三輪　いつの間にか私たちがそう言われる側になってしまいました。

篠原　でも、波長が不思議と合っちゃうんですね。

黒川　今日は久しぶりに会ったけど、先月も会っていたような、そんな雰囲気だったね。

昆　皆さま、本日はありがとうございました。引き続き『農業経営者』の応援をよろしくお願いします。